

「グループ中国だい好き」会報

『中国だい好き』

我们很喜欢中国!

Women hen xihuan zhongguo!

●代表 内田知行 042-464-8858

〒203-0034東久留米市弥生2-7-13

●編集・発行グループ

内田知行 千田茂

●<http://medialab.o.oo7.jp/china/> (ホームページ)●<http://www.kurukuru-ch.com/> (くるくる)

2023年度「中国を理解するための講演会」を開催

新型コロナウイルス感染症発生のため2020年から2022年まで講演会を休止しておりましたが、本年度から再開します。

参加費は無料です。たくさんの方の参加をお待ちしております。

中国だい好き 2023年度第1回講演会

日中戦争下における日本の華中支配と交通運営

——「愛路運動」を事例に——

日時：2023年5月28日（日） 13：00～15：00

場所：東久留米市生涯学習センター 第2集会学習室

講師：大野絢也さん（東京交通短期大学運輸科専任講師）

参加費：無料

■講演内容

日中戦争期、日本支配下の華中鉄道沿線で行われた「愛路運動」の実態についてお話します。「愛路運動」とは、「鉄道愛護運動」、「交通愛護工作」等ともよばれ、1933年に満洲での鉄道沿線一帯を守備するため、関東軍と満鉄により宣撫工作として開始されました。日中戦争の全面化により日本軍占領地が拡大し、愛路運動の実施地域も広がりました。しかし、満洲と比較して華中での交通網支配は安定せず、日本側は輸送維持と交通沿線の支配安定のために、満洲とは異なる様々な方策を通して「愛路運動」の展開を試みたのです。戦時下の交通支配を目的とした宣撫工作が、いかなる特質や限界を有していたのか、皆さんとともに考えてみたいと思っています。

★講師自己紹介

昨年春より、東京交通短期大学運輸科で専任講師をしています、大野絢也です。中国へは、湖南省長沙市の湖南師範大学へ2011～12年に語学留学しました。研究の専門分野は、中国近現代史です。特に南京国民政府期(1927～37年)から、日中戦争期(1937～45年)の交通や鉄道の歴史について研究しています。現代中国では、「一带一路」をスローガンに大陸各地を交通で結ぼうとする構想があります。その歴史的な淵源を探るのが、私の研究課題です。

中国だい好き 2023年度第2回講演会

中国における有機米の生産と流通について

日時：2023年6月18日（日） 10：00～12：00

場所：東久留米市生涯学習センター 第4集会学習室

講師：朴敬玉さん（帝京大学経済学部准教授）

参加費：無料

■講演内容

現在、食の安全や地球環境の保全、さらに農村地域の活性化のために有機農業が注目を浴びています。近年、中国でも人々の健康への関心が高まり、2000年以降、緑色・有機食品への需要が堅調に伸びています。本報告では、まず、有機農業の定義について検討したうえで、2000年代以降、中国における有機製品の法制化過程を概観します。そして、中国における有機米の生産、流通状況を、最後に黒龍江省一般農村における有機米生産への取り組みや流通の現状を分析します。

★講師自己紹介

朴敬玉（パクケイギョク）

1977年に中国吉林省で生まれる。2000年、中国で大学卒業後、日本に留学する。2011年、一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了し、博士（社会学）学位を取得する。日本学術振興会外国人特別研究員（PD）、一橋大学経済学研究科特任講師などを経て、2022年より帝京大学経済学部准教授。専門は東アジア社会経済史、中国農業経済。単著『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』（御茶の水書房、2015年）では、中国東北地域のジャポニカ米の生産がどのように開発、普及されたのかを明らかにしている。

学徒勤労働員の思い出

菅原 伸子

1944年4月、私は川崎市立川崎高等女学校に入学しました。ちょうど、学徒の通年勤労働員がはじまった年です。それでも1学期には授業がありましたから、学校に通いながら勤労働員に参加しました。場所は女学校から離れたところにあった農場（水田）でした。代掻きに始まり、田植え、草刈り、稲刈り、そして脱穀まで。最後の日には新米の配分がありました。いまでも憶えているのは、代掻きのとき、泥だらけの級友の顔に笑いこけていたら、引率の体育教師がメモを取っていたことです。当時の生徒はみな胸に名前と番号をつけなければいけませんでした。案の定、1学期の体育は低い評価でした。

2学期の終わり頃からは、明治製菓の川崎工場に勤労働員に行きました。今度は、自宅から工場に直行でした。工場では、兵士の糧食用の乾パンを作っていました。焼きあがったアツアツの乾パンを素手で包む作業だったので、やけどしそうでした。砂糖を原料に使っていたので、工場のなかはいつも甘い香りで満ちていました。しかし、私たちの昼食と云ったら、大食堂で、長い机とベンチに座って水のような雑炊を口にする毎日でした。あるとき上級生が1包み隠し持っていたのが、監視する憲兵隊に見つかって、大目玉でした。軍需品を作る工場ではなかったのに、やはり空襲に遭いました。空襲で真っ赤に燃える砂糖の塊をみて、「ああ、もったいない。甘い物が食べたーい」と思いました。

敗戦直前の1945年春から夏にかけての2年生の勤労働員先は、川崎トキコ工場でした。今度も、自宅から工場に直行しました。私たちの仕事は、航空機の錆びた部品を紙ヤスリで磨き上げる作業でした。新品のようにピカピカにするのです。手や指は真っ黒になり、節くれだって、女学生なのに見るも哀れな有様でした。作業中に何度か空襲警報が鳴りました。そのつど、仕事部屋から防空壕に避難しました。さいわいと、この工場で犠牲になった女学生はいませんでした。いまでも憶えていることは、ある日、昭和天皇の弟にあたる高松宮が工場視察に来たことです。視察時に、私たちは命令に従って頭を下げ、眼をつむりました。コツコツと一行が通り過ぎる音だけが聞こえました。眼を開けて凝視するのは「不敬行為」でした。数年たって親友の克子さんが言うことには、「あのとき、頭は下げていたんだけど、眼を開けて見ちゃった。宮様の靴がピッカピカに光ってた」。きっとその当時口にしたら大問題になっていたでしょうね。以上、腹立たしくて滑稽な「学徒勤労働員」の思い出です。

(聞き手・内田知行)

【編注】菅原さんの文章は、2023年4月19日の歴史講座（於東久留米市西部地域センター）でご報告いただいた「戦時下の歌唱と学徒勤労働員」の後半部分を書き起こしたものです。貴重な歴史の証言ですので、みなさんにご紹介します。今となっては、「学徒勤労働員」などという言葉を知っている人もすくなくなっていました。アジア太平洋戦争の時代に青春を送った日本人にとっては、青春と学徒勤労働員とは切り離すことができません。これは、高等・中等教育機関の学生・生徒を戦争の遂行に協力させるために行なわれたさまざまな形の動員をさしたものです。アメリカとの戦争が始まる直前の1941年11月には「国民勤労報国令」がだされ、1943年6月には「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定されました。これ以降、軍需工場への勤労働員が本格化したのです。同年10月の閣議決定では、「教育実践の一環」として1年間の3分の1に相当する期間を勤労働員にあてることが決まりました。そして1944年3月の閣議決定では、動員対象が当時の中学校1・2年生や国民学校（いまの小学校）高等科児童に拡大されるとともに、通年の勤労働員が始まりました。1945年3月の閣議決定では、国民学校初等科以外の学校の授業を1年間停止し、教職員と生徒による「学徒隊」が作られることになったのです。以上のように、若者の生死を決める重要な政策が、どんどん閣議決定されていったのです。そして、「学徒」なのに、当時の若者は、こうして学ぶ場所を国家によって完全に奪われてしまったのです。閣議決定によって新たな政策が次々と出されているいま、過去の体験の証言を未来を考える貴重な良薬として受けとめなければならない、と思うのは私だけでしょうか。

（内田知行）

中国語教室 生徒募集

クラス	講師	授業日時 教科書など	教室会場
初級A	勝木 節子	土曜 18:00～20:15	中央町地区センター
初級B	任 韶華	土曜 13:30～15:30 汉语听力速成 基础篇	久留米中学校 生涯学習センター 八幡町地区センター
中 級	羅 敏	月曜 10:00～12:00 『時事中国語の教科書』	生涯学習センター 市民プラザ 東部地域センター
会話 (話そう朋友)	金野 蓓蕾	火曜 10:00～12:00 自由会話+副教材	生涯学習センター 東部地域センター

入会金 1000円 年会費 1000円(新会員は入会金で充当)

運営費(月謝, 会場費など)毎月4,000円。2クラス目は月2,000円で聴講できます。

各クラスとも授業見学を歓迎します！

- 問い合わせ zuixihuanzhongguo@gmail.com
- 広報 ホームページ <http://medialab.o.oo7.jp/china/>
くるくる <http://kuru-chan.com/>